

令和6年度 第2回宮城県産業教育審議会 会議概要

日 時 令和6年12月24日（火） 午前10時から正午まで
場 所 宮城県庁行政庁舎4階 特別会議室
出席委員 川島滋和委員、佐藤千洋委員、後藤美恵子委員、梅津理恵委員、島瀬康史委員、
勅使瓦理恵委員 以上6名出席、6名欠席
県出席者 遠藤副教育長
菊田高校教育課長
高橋高校教育課教育改革担当課長
吉田高校教育課副参事兼総括課長補佐兼総括室長補佐
伊藤高校教育課総括課長補佐 他関係職員（事務局）

次 第

1 開 会

2 開会挨拶 遠藤副教育長
川島産業教育審議会会長

3 報 告

- (1) 第1回宮城県産業教育審議会報告
- (2) 宮城県産業教育審議会第4回専門委員会報告

4 審 議

(1) 提言（案）について

① 骨子の柱の入替について

- 梅津委員： 骨子の柱の順番を変えたことで、締まった内容になった。
- 後藤委員： 骨子の柱の順番変更については良いが、前回まであった「魅力の発信」という文言がなくなったが、その理由は何か。
→事務局： 魅力の発信については、発信だけでなく、学び全体をということで仕立てている。発信も含めて学びの方策について述べることにしたが、再検討したい。
- 佐藤委員： 骨子の柱の順番の変更については良いと思う。専門委員会でファシリテーターやコーディネーターが必要という意見が多かった。本文にはコーディネート機能という記載となっているので、とても良い。

② 骨子1「少子化を踏まえた魅力ある新たな学びの方策について」

- 梅津委員： 多様性を含む、情報化やグローバル化など人材育成の内容は過不足なく取り上げられている。
- 後藤委員： 国際的な視点、異文化等の言葉がある。どこの国を取り上げるのかなどの考えがあれば教えてほしい。
→事務局： どこの国というのは限定していないが、アジア圏や英語圏などという意見が出されている。指摘をもとに記載を考えていきたい。
- 課 長： 宮城県として、インドネシアと人材に関する協定を締結しており、また、教育委員会としても台湾との協定を結び、高校生間での交流が増加している。最近では地方ま

で外国人材が増加しており、高校生が外国人と触れ合う機会が増えることが予想される。

- 島瀬委員： 外国人材と一緒に働くことはもとより、今後の販路を考え、取引相手として考えていく必要もある。どこの国という話題であるが、欧米豪もあるし、インバウンドも今後変化してくると思う。

→課 長： 現在、県内専門高校ではe コマースの学習などを実施しインターネットを活用して海外にもアピールする学びも導入している。

- 後藤委員： 海外の方と一緒に学ぶことは効果が高い。文化の違いも踏まえて広がりをもっていければ良い。自分も東南アジアにおける探究活動をやっているが、協働教育においては、どのように専門性を高めていくかのゴール設定が大事になる。

もう一つはコーディネーターについても教員側が意図をもって活用していくことが必要である。

③ 骨子2「専門高校と地域・産業界等の連携・協働の取組強化について」

- 梅津委員： 半導体産業を取り上げることにについては今のタイミングとしてはどうだろうか。ナノテラスを取り上げていただいていることは関係者として嬉しいことだ。

- 島瀬委員： 半導体産業については、人口減少の中で高付加価値産業への転換ということであれば良いが、書きぶりに唐突感がある。ナノテラスについても、高校生の人材育成の代表例として使うには高度すぎるのではないかな。もう少しバランスの取れた書きぶりになるといいのではないかな。

- 川島委員： 半導体産業が少し飛び出ている感はある。もう少しわかりやすいもののほうが訴求しやすいのではないかな。

- 佐藤委員： 富県戦略の一つで半導体が入っている。そのため、半導体について取り上げているのではないかな。

- 島瀬委員： コーディネーターとファシリテーターについて混同して使用していないか書きぶりを統一する方が良い。

- 勅使瓦委員： コーディネーターも単独で走るようなコーディネーターだと、学校の中でうまく立ち回れない。教員が学ぶ制度についても、研修が多すぎる現状からするとなかなか難しい。

- 佐藤委員： ファシリテーターやコーディネーターは職種ではなくその「機能」が大事。これらの教員は、ただものを教えるというだけではなく、学びの場と問いをデザインするという意味でも、ファシリテーション能力が不可欠になってきている。教員がファシリテートを身に付ける制度、教員の育成の機会があれば良い。

- 島瀬委員： 「多能工」のくだりがあるが、実際にはどこで活かせるのか。創業・起業にフォーカスしても良いのではないかな。地域産業を見た際に商業が課題であり非常に大切なところ。人口減少が進めば地域が存続することが困難。海外に市場を求めどうやって稼ぐかは商業科の頑張りどころ。宮城県で教育を受けた子どもたちがどこを目指していくのが課題である。

- 川島委員： 質問だが、日本版デュアルシステムとはなにか。インターンシップとの違いは何か。

→事務局： デュアルシステムは職業能力の形成において、企業実習やOJTの組み合わせを行

い、最後に能力評価をする特色がある。9ヶ月以上3年以下という期間で実施しており、県内では一迫商業で実施している。

- 後藤委員：デュアルシステムについて、最後に能力評価を行うという話があった。評価の方法等の考えがあればお聞きしたい。

→事務局：一迫商業高校では、単位認定等行っている。

- 勅使瓦委員：「多様で柔軟な学び」は理念としてはいいが、現場で実現可能なのかとを感じる。教員を貼り付けるのは定数の関係で難しい。そうすると遠隔授業ということになるが、各学校で教科書や時間割に違いがあり、学校間で計画を立てすり合わせをしなければ困難である。

- 勅使瓦委員：普通科と専門学科がある高校に勤務経験があるが、普通科と専門の学びをオープンで行おうとすると、場所やカリキュラム等でやりにくさがある。実現にはハードルが高い。

④ 骨子3「産業人材育成のための学校・学びの在り方について」

- 川島委員：資料はよくまとまっているが、「職業教育拠点校」という表現について、卒業後の出口が「就職」に限定され「進学」は目指さない学校のように感じるが、どのようなイメージをしているのか。「進学を諦めた人が行く高校」と誤解されない書きぶりにしたい。

→事務局：職業教育拠点校については、3校を統合して6次産業化といった複合的な学びができる。卒業後の進路についてはもちろん多様であり、就職、進学両方の生徒の希望に対応している。また呼称だが、文部科学省で産業系専門高校の学びについて「職業教育」という呼称を使っている。

- 梅津委員：遠方からの対応とはどのようなものを想定しているか。また、普通科と専門学科が併設されている学校はどれくらいあるのか。

→担当課長：普通科と専門学科の併設校は、白石高校（普・看）、名取高校（普・家）、塩釜高校（普・商）、松島高校（普・商）、黒川高校（普・工）などが挙げられる。遠方からの生徒への対応については、寮や通学バスなどが考えられるが、まだ決まっているものがあるわけではない。

- 川島委員：理念は大事だが、小中学生にとっては部活や研究などの「いい青春」が送れるかどうかといった魅力の部分が大事。そういった部分を提言の中に入れることはいいか。大学においてもリカレント教育が求められている。産業系の高校に入学する若者に、大人としてどのようなメッセージを送れるか。若くして社会に出るメリットなどとは何か、熟練工の未来を考えられる提言にしたい。

- 勅使瓦委員：中学生が学校を選ぶ基準として家から通えるかどうかというところが大きい。専門高校には実習をしてみたいという生徒が多い。オープンキャンパスや口づてで楽しそうだと思えることが人気のようだ。中学校段階で将来このような仕事に就くということを決めるのは困難で、そのような子どもたちは普通科に行くことが多い。学びの様子を発信することは必要。

→事務局：魅力発信の項目を復活させるなども考えたい。石巻の専門高校3校と石巻北高校が学校や学科の枠を超えて石巻を盛り上げるというコンソーシアムを作っている。活動中間発表の際に、小中学生に声をかけて足を運んでもらった。親近感をもって高校に

入学し、地元就職するということに繋がればと考えている。魅力発信に関する書きぶりを考えていきたい。

- 川島委員： 骨子全体はよくまとまっている。小中学生に魅力を伝えるために、提言の中に隠れている具体の事例をもう少し追記すると伝わりやすいのではないかな。

5 その他

今後の審議会開催日程について

6 閉 会